

第 56 回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成 30 年 7 月 29 日

名古屋春栄会事務局

目 次

嵐山（あらしやま）	1
絃上（けんじょう）	2
放下僧（ほうかそう）	3
西王母（せいおうぼ）	4
経政（つねまさ）	5
歌占（うたうら）	6
葛城（かすらき）	7
箬（えびら）	8
室君（むろぎみ）	9
鶺鴒ノ段（うのだん）〔鶺鴒飼（うかい）〕	10
融（とおる）	11
柏崎（かしわざき）	12
阿漕（あこぎ）	13
兼平（かねひら）	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第56回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

嵐山（あらしやま）

【分 類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊中ノ舞

【作 者】 金春禅鳳

【主人公】 前シテ：花守の老人（面・小尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

嵯峨帝に仕える臣下が、勅命を受けて、嵐山へ桜の咲き具合を見に行きます。というのは大和吉野山が桜の名所であることは有名ですが、あまりに都から遠いので、花見の御幸も簡単にはできません。それで吉野の千本の桜を、都近くの嵐山に移し植えられましたが、吉野の花が今は盛りだというので、嵐山の花もよく咲いているのではないかと、というお尋ねがあったからです。勅使一行が嵐山につくと、老人夫婦が現れ、木陰を清め、花に向かって祈念します。勅使がその謂れを聞くと、老人夫婦は、この千本の桜は、吉野から移されたものだから、木守、勝手の二神が時折現れて守護する神木であり、嵐という名だが、花を散らさないのだと語ります。やがて自分達こそ木守、勝手の神なのだと言乗り、再会を約して、雲に乗って吉野の方に飛び去ります。

<中入>

そのあと、蔵王権現の末社の神が現れ、勅使一行に対して舞を舞ってもてなしていると、木守、勝手の二神が今度は神の姿で現れ、嵐山の美景を眺めつつ舞樂を奏します。続いて蔵王権現も現れて、衆生の苦患を助け、国土を守ると誓い、栄ゆる御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

和光利物の御姿。和光利物の御姿。我本覚の都を出でて。分段どうごの塵に交わり。金胎兩部の一足をひっさげ。悪業の衆生の苦患を助け。さて又虚空に御手を上げては。たちまち苦海の煩惱を払い。悪魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて。国土を照らし。衆生を守る。誓を現わし。子守勝手。蔵王権現一体分身同体異名の姿を見せて。おのおの嵐の山によじ登り。花にたわむれ梢にかけって。さながらここも黄金の峰の。光も輝く千本の桜。光も輝く千本の桜の。栄ゆく春こそ。久しけれ。

絃上（けんじょう）

【分類】四・五番目物（貴人物、略脇能） ＊早舞

【作者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、
後シテ：村上天皇の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾じていると、にわかにか雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

放下僧（ほうかそう）

【分類】 四番組物（現在物） *羯鼓〔かっこ〕

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、眞木野左衛門は、相模国（神奈川県）の刀禰信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の眞木野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るといので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

面白の。花の都や筆に書くとも及ばじ。東には。祇園清水落ちくる滝の。音羽の嵐に地主の桜はちりぢり。西は法輪。嵯峨の御寺廻らば廻れ。水車の輪のいせき井堰の川波。川柳は。水に揉まるるふくら雀は。竹に揉まるる野辺のすすきは。風に揉まるる都の牛は。車に揉まるる茶臼は挽木に揉まるる。げにまこと。忘れたりとよこきりこは放下に揉まるる。こきりこの二つの竹の。代々を重ねて。うち治めたる御代かな。

西王母（せいおうぼ）

【分類】 初番目物（脇能＝女神物） ＊中ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ・後シテ：西王母（面・増女）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

周（中国）の穆王の時代に、帝主催の宴が開かれます。その宴の最中、ある女が桃の枝を持って帝のもとへ現れます。帝は西王母の桃であろうと喜びますが、女は、自分が西王母の化身であり、この世を言祝ぐため、桃の実を持って再び訪れることを予言して消え去ります。

<中入>

人々が様々な管弦を奏して西王母の到来を待ち受けていると、西王母は桃の実を携えた侍女とともに現れます。その桃の実を皇帝に捧げた後、西王母は優雅に舞いながら明け方の雲に紛れて天上へと帰っていきます。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

つるぎを腰にさげ。劔を腰にさげ。眞纓の冠をき。玉觴に盛れる桃を。侍女が手より取り渡し。君にささぐる。桃實。花の盃。とりあえず。

<中ノ舞>

花も酔えるや盃の。花も酔えるや盃の。手まずさえぎる曲水の宴かや御川の水に。戯れ戯るるたおやめの。袖も裳裾もたなびきたなびく。雲の花鳥。春風に和しつつ。雲路にうつれば。王母も伴いよじのぼり。王母も伴い上るや天路の。行方も知らずぞ。なりにける。

経政（つねまさ）

【分 類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を消し給えとよ。灯火を背けては。灯火を背けては。ともに憐れむ深夜の月をも。手に取るや帝釈修羅の。戦いは火を散して。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩し我と身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身を焼く苦患恥かしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとして。その身は愚人。夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は失せにけり。

歌占（うたうら）

【分類】 二、四番目物（男物狂物） *カケリ

【作者】 観世十郎元雅

【主人公】 シテ：渡会家次（直面）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

伊勢二見の神職渡会家次は、諸国一見の旅の途中、急死しましたが、三日後には蘇生します。しかし、地獄を見て来た恐怖のため。髪は真白に変じてしまいます。そして今は、和歌の文辞によって吉凶を判じる歌占を渡世として、諸国を流浪していますが、たまたま加賀国（石川県）白山の麓へやって来ます。一人の里人が、最近この地に来た男神子の歌占がよく当たるということを聞いて、親に別れて尋ね歩いている子供を連れて、見てもらいに来ます。最初里人が、短冊をひくと「北は黄に南は青く東白、西紅に染め色の山」とあります。神子は、親の病気は治り長生きすると判じます。つづいて子供が短冊をひくと「鶯のかいこ（卵）の中の時鳥、しゃ（己）が父に似てしゃが父に似ず」とあり、父の行方を尋ねると、神子はその歌の意味を説明し、これは既に逢っている占だと判じます。そして不思議のあまり、身の上を問いただすと、我が兄であることがわかり、奇しき再会を喜びます。里人は別れに、地獄の曲舞を所望します。巫子は、これを謡うと神がかりになるのでとためらいますが、せっかくの頼みだからと舞い始めると果たして正気がなくなります。が、やがて狂乱から覚め、親子は故郷へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

五体さながら苦しみて。白髪は乱れ逆髪。雪を乱せるごとくにて。天に叫び。地に倒れて。神風のひと揉み揉んで。かみかぜのひと揉み揉んで。時しも卵の花くだしの。さみだれも降るやとばかり。面には。白汗を流して。袂には露の繁玉。時ならぬ霞玉散る。あしぶみはとうとうど。手の舞い笏拍子。打つ音は窓の雨の。震いわななき立つ居つ。肝胆を砕く神の怠り。申し上ぐると見えつるが。神は上がらせ給いぬとて。ぼうぼうと狂い覚めて。いざやわが子ようち連れて。またも帰りなば二見の浦。またも帰らば二見の。浦千鳥友呼びて。伊勢の国へぞ帰りける。

葛城（かずらき）〔大和舞〕

【分類】 三番目物（鬘物） *神楽

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思っ、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるとって消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇特なことと思い、夜もすがら女神のために祈ります。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

としふる雪や。しもという。葛城山の岩橋の。夜なれど月雪の。さもいちしるき神体の。みぐるしき顔ばせの。神すがたは恥かしや。よしや吉野の山かづら。かけて通えや岩橋の。高天の原はこれなれや。神楽歌はじめて。大和舞いぎや。かなでん。ふる雪の。しもという花の。しらにぎて。

<神楽>

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内にぞ入り給う。

籬（えびら）

【分 類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里人（直面）、後シテ：梶原源太の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州から都見物を志す一人の旅の僧が、早春の頃、須磨の浦の生田川のほとりに着きます。ちょうどそこに、色あざやかに咲いている梅の木があるので、来合わせた男に問うと、籬の梅だと答えるので、どうしてそういう名がついたのかと尋ねます。その男は源平の合戦の時、源氏方の若武者梶原源太景季が折から咲き誇っていた梅の花を手折って、笠印の代わりに籬にさし、めざましい活躍をしたので、籬の梅の名が残ったとその由来を語ります。さらに一ノ谷の合戦の様子を詳しく物語るの、僧が不審がると、男は自分は景季の亡霊だと名乗って、たそがれ時の梅の木陰に消え失せます。

<中入>

土地の者から重ねて籬の梅の話聞いた僧は、奇特の思いに立ち去りかね、木陰で仮寝をしていると、夢に武者姿の影季が現れ、修羅道での苦患を見せ、また往昔の合戦でのめざましい戦ぶりを見せたかと思うと、夜明けと共に回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

山も震動。海も鳴り。雷火も乱れ。悪風の。紅焰の旗をなびかし。紅焰の旗をなびかして。閻浮に帰る生田河の。波を立て水をかえし。山里海川も。みな修羅道の巷となりぬ。こはいかにあさましや。しばらく心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。ひと枝手折りて籬にさせば。もとよりみやびたる若武者に。あいおう若木の花かずら。かくれば籬の花も源太も。我先駆けん先駆けんとの。心の花も梅も。散りかかって面白や。敵のつわものこれを見て。あっぱれ敵よ逃すなとて。八騎が中にとりこめらるれば。兜も打ち落とされて。大童の姿となつて。郎等三騎に後ろをあわせ。向う者をば。拌み打ち。まためぐりあえば。車斬り。蜘蛛手かく繩十文字。鶴翼飛行の秘術を尽くすと見えつるうちに夢覚めて。しらしらと夜も明くれば。これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古巣に帰る夢の。鳥は古巣に帰るなり。よくよく吊いてたびたまえ。

室君（むろぎみ）

【分 類】四番目物（夜神楽物・略初番目物） ＊神楽、中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：韋提希夫人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）室明神の神職が神事を執り行おうと、室津の遊女たちを神前に集ま
らせたところ、室君達は梅の香が匂う春の夜の興趣を歌いつつ、船に乗ってやって
来ます。神職の命により、棹の歌を歌い、神楽を奏していると、室明神が女体の姿
で現れます。そして、感涙に袖をぬらしていると、夜も明けはじめ、明神は空高く
昇っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

玉のかんざし羅綾のたもと。玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびき瑞雲に乗り。
所は室の。海なれや。山はのぼりて上求菩提の機をすすめ。海はくだりて下化衆生
の相を現し五濁の水も。実相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好まこ
とに肝に銘じ。感涙袖をうるほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明け方の雲に
のりて。虚空にあがらせ。給いけり。

鵜ノ段（うのだん）〔鵜飼（うかい）〕

【分類】 五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作者】 榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】 前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞（『鵜ノ段』）の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにならでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと言ひ、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ落ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞（『鵜ノ段』）の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉禱。鵜籠を開き取り出し。鳥つ巢おろし荒鵜ども。この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひ回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりゆく悲しきよ。鵜舟のかがり影消えて。闇路に迷うこの身の。名残惜しきを如何にせん。名残惜しきを。如何にせん。

融（とおる）

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） *早舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

忘れて年を経しものを。まった古に帰る波の。満つ塩竈の名にしおう。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わの遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈に心をうつし。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝枝に。光を花と。散らす粧い。ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の杯。うけたりうけたり。遊舞のそで。

<早舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくみならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くと飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

柏崎（かしわざき）

【分類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：柏崎某の妻（面・曲見）、
後シテ：柏崎某の妻〔狂女〕（面・曲見）

【あらすじ】（独吟〔道行〕の部分…下線部）

越後国（新潟県）の柏崎の領主某の従者が鎌倉から帰国し、主人である柏崎の領主が鎌倉で急逝したことを領主の妻に報告します。それを聞いた領主の妻は夫の死を受け入れることなどできないと嘆き悲しみます。さらに、父の死を嘆いて出家するという息子花若からの手紙を目にし、夫と息子という愛する二人を一度に失った領主の妻の嘆きは、わが子への恨みに変わります。しかし、その一方でわが子を守り給えと神仏に祈るのでした。

<中入>

時が過ぎ、信濃国（長野県）の善光寺で、僧の姿をした花若が、住職に伴われて如来堂に向っています。阿弥陀如来へのお勤めを始めて、今日がちょうど満参日に当たるのです。そこへ一人の狂女が現れます。この女こそ、夫の成仏を願い、子の無事を願っているうちに、仏に導かれるようにこの善光寺へやって来た柏崎の領主の妻でした。如来堂に上がり、夫の成仏を祈念しようとする狂女に、住職は女人の身で如来堂に上ることは叶わぬゆえ、早々に立ち去るよう伝えます。しかし、狂女は如来堂から立ち去ろうとせず、供物として持参した夫の形見の烏帽子と直垂を取り出して、自らの心の内を阿弥陀如来に訴え始めます。その狂女の一途な様子を見ていた花若は、自分こそ息子であると狂女の前に名乗り出ます。互いの変わり果てた姿にしばし呆然とする母と子ですが、それが現実であることを知ると、心の底から互いの無事と再会を喜び合うのでした。

【詞章】（独吟〔道行〕の部分の抜粋）

越後の国府に着きしかば。越後の国府に着きしかば。人目も分かぬわが姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。うら遙々と行くほどに。松陰遠く寂しきは。常盤の里の夕べかや。われにたぐえて。あわれなるはこの里。子ゆえに身を焦がししは、野べの木島の里とかや。降れども積もらぬ淡雪の。浅野というはこれかとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見なして。西に向かえば善光寺。生身の弥陀如来、わが狂乱はさて置きぬ。死して別れし。夫を導きおわしませ。

阿漕（あこぎ）

【分類】四番目物（執心物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：漁翁（面・尉面）、後シテ：阿漕の亡霊（面・瘦男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州日向国（宮崎県）の男が伊勢参りを思い立ち、長い旅路の末、伊勢国（三重県）安濃の郡までやって来ます。ちょうど現れた一人の年老いた漁師に、ここが阿漕が浦であることを教えられたので、この浦を詠んだ古歌を口ずさむと、老人も別の古歌を詠じます。そこで旅人が、この浦の名のいわれを聞くと、老人は、昔からこの浦は、大神宮の御膳を調えるための網を入れるところなので、一般には禁漁となっていたのだが、阿漕という漁師がたびたび密漁をしていた。やがてその事がわかって、彼は捕らえられ罰としてこの沖に沈められた。そのことから阿漕が浦というようになったのだと物語り、その罪に今も苦しんでいるので弔って下さい、と言います。旅人が、さては阿漕の幽霊だなと思っていると、その老人は、夕暮の海辺に網をひく様を見せながら消え失せます。

<中入>

旅人は不思議に思って、浦の人に、阿漕が浦の故事を聞き、先程の老人の話をする
と、浦の人はきっと阿漕の亡霊にちがいないから回向してやるようにすすめて去り
ます。旅人が、法華経を読誦していると、阿漕の亡霊が四手網を持って現れ、密漁
の有様と地獄での苦しみを見せ、救ってほしいと願って、また波間に消えていきま
す。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

丑三つ過ぐる夜の夢。丑三つ過ぐる夜の夢。見よや因果のめぐり来る。火車に業を
積む。数苦しめて目の前の。地獄も誠なりげに。恐ろしの気色や。思うも怨めし。
いにしえの。思うも怨めしいにしえの。娑婆の名を得し。阿漕がこの浦に。なお執
心の。心引く網の。手馴れしうろくず今はかえって。悪魚毒蛇となって。紅蓮大紅
蓮の氷に。身を痛め。骨を砕けば。叫ぶ息は。焦熱大焦熱の。焰煙雲霧。立居に隙
もなき。冥途の責もたび重なる。阿漕が浦の罪科を。助け給えや旅人よ。助け給え
や旅人とてまた波に。入りにけり。また波の底に。入りにけり。

兼平（かねひら）

【分類】 二番目物（修羅物）

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：船頭の翁（面・三光尉）、後シテ：兼平の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

粟津で討死した木曾義仲を弔おうと思い立ち、木曾の僧が春の近江路を粟津へと向かっていました。やがて矢橋の浦につくと、一人の老人が柴舟で行き過ぎようとするので、僧は老人に舟に乗せてくれるよう頼みます。老人はいったんは断わりますが、僧が重ねて頼むと、仏の教えは川を渡るのに渡し船を得るようなものという例えを思い出し、僧を柴舟に乗せます。粟津に向かう船上で、老人はあたりの名所を教えます。延暦寺の来歴などの話しを聞くうちに、舟は粟津の浦につきます。

<中入>

日も暮れ、僧は露深い粟津の草原で義仲の霊を弔いつつ野宿します。突然、鬨の聲が響き渡り、甲冑に身を包んだ武将が出現します。僧が誰かと尋ねると、亡き主を弔いにはるばる来たというので兼平が迎えたのだと答えます。今井四郎兼平といえは義仲の配下で、義仲と共に粟津で果てた武将です。これは夢かと訝しがる僧に、武将は昨日の老人も自分であったと明かし、昨日の舟を極楽への渡し舟として自分を彼岸へと送ってほしいと頼みます。兼平は義仲と自分の最後の戦いの様子を語り、一時は都を押さえた義仲でしたが、頼朝の軍にせめられてついにはたった七騎となって逃れますが、ついに義仲、兼平の二騎となってしまいます。人手にかかるのは末代まで恥辱との兼平の言葉に、ついに義仲も粟津の彼方の松原をめざしますが、薄氷のはった深田に、騎馬が足を取られて動けなくなってしまいます。今はこれまでと自害しようとして、最後に兼平の方を振り返ったその時に、矢が兜に突き刺さり義仲は落命しました。義仲が打ち取られたという声を聞いて、兼平は名乗りをあげて討ち手の大軍の中にわけいり、最後の戦慄をしたのち、刀をくわえて馬から飛び降りて自害して果てたのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

兼平はかくぞとも。知らで戦うそのひまにも。御最期の御事を。心にかくる。ばかりなり。さてその後に思わずも。敵の方に声立てて。木曾殿討たれ給いぬと。呼ばれる声を聞きしより。今は何をか期すべきと。思い定めて兼平は。これぞ最期の高言と。あぶみふんばり大音上げ。木曾殿の御内に今井の四郎。兼平と名乗りかけて。大勢に割って入れば。もとより一騎当千の秘術を現し大勢を。粟津の。汀に追っつめて磯打つ波の。まくり切り。蜘蛛十文字に。打ち破りかけ通って。その後自害の手本よとて。太刀をくわえつつ逆さまに落ちて。貫かれ失せにけり。兼平が最期の仕儀。目を驚かす有様かな。目を驚かす有様。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>